

「東二口地区で安心して暮らせる地域づくり」に関する調査研究

指導教員：金城大学社会福祉学部 講師 田中克恵・助教 西郁代子

参加学生：石川裕香・伊藤尚彰・伊藤雄太・稲垣和隆・小杉竜也・古濱成美・田中沙昌・谷口智史・
出村純平・東藤右将・富山智恵美・豊岡昭洋・中町永里佳・能手啓子・水野雅也・
大塚千寿瑠・古屋誉幸

1. 調査研究成果要約

東二口地区の住民への質問紙・面接等の調査から、住民は除雪対策や野生動物の対応、食料購入等の生活維持、健康・介護、人口減少に関する不安を抱えていることが明らかとなった。この地区で安心して暮らし続ける為に、買い物支援（買物代行や食品の移動販売）、デマントタクシーの活用（電話予約で運行する乗合タクシー）、除雪のボランティアネットワークの構築、移動診療所、雇用対策等の検討の必要性が見出された。

2. 調査研究の背景と目的

白山市東二口は、白山麓旧尾口村にある自然豊かな地域である。白山麓周辺では過疎化が進んでおり、東二口地区も例外ではない。以前は林業やスキー場等の観光産業が発展していたが、暖冬の影響を受け近年では地区を訪れる人もまばらである。また、若者の流出が著しく、過疎化の進行を止めることは現時点では困難な状況である。

そのような中、先祖代々の土地を守り、暮らしている人々の高齢化が目立っている。山間部で豪雪地帯でもあるこの地区で、このような人々がこれからも生活を継続するためには、住民の力だけでは限界があり、住民と住民、地域、行政が協力し、安心して暮らせる地域を創る事が求められる。それは、住民同士の絆を深めること、地域のコミュニティの改善、医療・福祉・教育の充実や交通手段の確保など、様々なニーズが考えられるが、実際に住民が求めるものは何なのか、それを把握することが重要となる。

和気（2007）は、地域福祉を下から“創り上げていく”福祉であると述べているが、その中で、地域住民が主体的に福祉の事業・活動に関わること、又、それらを可能にする様々な福祉環境の整備が必要だと述べている。また、地域住民自らが地域社会の抱える生活課題を明らかにして、自らその解決に向けて活動する意識を醸成する事の重要性を紹介している¹⁾。このように、住民の不安や課題を踏まえたうえで、住民の積極的な参加が必要となる。

そこで本調査研究では、まずは住民の協力を得ながら住民が抱える生活上の不安と課題を、個人、環境、地域から捉え、明らかにする事を目的とする。

3. 東二口地区の概要

白山麓の旧尾口村（現白山市）にあり、鶴来から白峰・勝山方面へ向かう国道157号線を、手取りダムの直前でわき道に入り、坂を上った山の中腹に位置する。周辺に鷲走ヶ岳や白抜山がある。

2008年3月待つ住民基本台帳によると、地区には23世帯、59名の人びとが暮らしている。そのうち、19歳以下の占める割合は15.3%、65歳以上の占める割合は39%となっている。

地区には350年ほど前に文弥人形浄瑠璃（でくの舞）が伝わり、重要無形民族文化財の指定を受け、住民により引き継がれている。毎年、地区の文化民族資料館で4日間に渡り公演する。

4. 調査研究の内容

東二口地区の住民が抱える生活上の不安と課題を明らかにすることを目的に、以下の4つの調査を実施した。

【調査1】住民への生活上の不安と課題に関する調査用紙を作成する為に、東二口地区に在住する住民1名を対象に、地区の概要・魅力、生活環境、将来の希望・不安等について半構造化面接を実施し、そ

の内容を基に、質問紙調査用紙を作成した。

【調査2】東二口地区の20歳以上の住民を対象に、対象者に関する基本情報、生活の満足度に関する事項、地域が持つ資源や可能性・希望等に関する事項、地域で生活を継続する上での不安や心配事等に関する事項等について、自記式質問紙調査を実施し、住民の抱える生活上の不安と課題を検討した。

【調査3】住民に調査2の結果報告した上で、地域から住民数名を選出してもらい、これらの対象者に質問紙調査で得た結果を基に半構造化面接を行うことで、質問紙調査では得られない詳細なデータを収集する。そして、住民が地域や行政に期待するもの・求めているものは何かを検討した。

【調査4】調査から明らかとなった生活上の課題について、高齢者の視点で地区の生活環境を視察し、検討した。

5. 各調査の内容と結果

1) 調査1：東二口地区住民1名（尾口公民館長）への半構造化面接

(1) 調査目的と方法

より地区住民の生活ニーズに対応した調査用紙を作成することを目的に、東二口地区に在住する尾口公民館長を対象に半構造化面接を2009年6月に実施した。地区の特徴や住み続ける上での希望・不安等についてインタビューした。データは、本人の了承を得た上でI.C.レコーダーに録音し、後日、逐語録化した。得たデータを基に質問紙調査の調査項目を検討した。

(2) 結果

明治の頃は東二口地区の世帯数は120～130世帯であったが、現在は16戸程度、そのうち11戸は鶴来・野々市に別途家を持っている。人口37名程度でうち70歳以上はおおよそ22名。地区の魅力として、自然と国の重要無形文化財に指定されている人形浄瑠璃があり、地域住民の団結力を保つ。生活環境について、買い物は鶴来や松任まで行くことが多い。移動手段は車。住宅は築200年くらいの家屋が多い。周辺に仕事がない為、在住している者は公務員か土建屋。猿や猪の害獣の被害がある（地区は山の中腹に位置する）。冬季は積雪が多い。地区の高齢化が進んでいる為、除雪や清掃作業等を行える住民が少ない。地区に期待することは、人間浄瑠璃に熱心な若者が戻ってくれること、農業・林業の繁栄等。市の対応として税金（住民税）が無料になれば住民も増えるのではないかと。

(3) まとめ

2008年3月末の住民基本台帳と異なり、実際、平日に東二口地区に在住している人口はそれより少ない。仕事の勤務先が鶴来や松任、野々市町である者が多く、通勤距離や冬季の積雪等の理由から地区を離れる者が多い。その為、住民の半数以上は70歳以上となっている。現実には過疎・高齢化が進んでいる。住民の生活上の不安や課題を調査する為の質問項目を作成するに当たり、面接内容を踏まえ、質問項目を検討した。また、調査対象者の多くが高齢者であることを考慮し、多肢選択式の設問を中心として、調査にかかる負担をできるだけ軽減するようにした。

2) 調査2：東二口地区住民への質問紙調査

(1) 調査目的と方法

住民の抱える生活上の不安と課題を明らかにすることを目的に、東二口地区に在住する20歳以上の31名を対象に、多肢選択および自由記載による自記式質問紙調査を実施した。調査項目は、調査1の結果を基に作成し、回答者の属性、健康に関する事、地域における生活に関する事等である。調査用紙の配布と回収は公民館館長に依頼した。その際、プライバシー保護のため、回答者に調査用紙を配布した封筒に入れて厳封し、提出するように依頼した。倫理的配慮として、研究の趣旨および調査結果を公表する旨を文書で説明し、同意の得られた人のみを対象とした。

(2) 結果

29名から有効回答を得た。回収率は93.5%であった。以下の①～⑪・⑰は択一式で回答を求め、⑫～⑯・⑱は複数回答とした。また、(%)は、回答のあった29人中の割合を示す。

①回答者の年齢は、39歳以下が0人、40代2人(7%)、50代5人(17%)、60代7人(24%)、70代9人(31%)、80代6名(21%)であった。

②回答者の性別は男性13人(45%)、女性16人(55%)であった。

③回答者の職業は、「無職」が最も多く15人(51.7%)、次いで「会社員」3人(10.3%)、「林業」「主婦」と回答した人がそれぞれ2人(6.9%)であった。

④同居人数が「2人」と回答した人が最も多く14人(48.3%)であった。次いで「3人」が13人(44.8%)、「1人」「4人」がそれぞれ1人(3.4%)であった。

⑤経済状況について、「多少心配」と回答した人が最も多く13人(44.8%)であった。次いで「それほど心配ない」が9人(31%)、「わからない」が4人(13.8%)、「非常に心配」が1人(3.4%)であった。

⑥現在の健康状態について、「普通」と回答した人が最も多く13人(44.8%)、次いで「あまり良くない」が8人(27.6%)、「良くない」が3人(10.3%)、「良い」「まあ良い」と回答した人はそれぞれ2人(6.9%)であった。

⑦介護保険制度の利用状況について、「利用したこともないしサービスについて知らない」と回答した人が最も多く17人(58.6%)であった。次いで「利用したことはないがサービスを知っている」が8人(27.6%)、「現在利用している」が1人(3.4%)であった。「過去に利用したことがある」と回答した人はいなかった。

⑧今後、介護が必要になった場合、介護サービスの利用希望を問うところ、「利用したい」と回答した人は18人(62%)、「利用したくない」が1人(3.4%)、「わからない」が8人(27.6%)であった。利用したくない理由として、「出来る限りしたくないが、状況次第で世話になることもあると思っている」と記載されていた。

⑨東二口地区での生活の満足度では、「まあ満足」と回答した人が最も多く10人(34.5%)であった。次いで「満足」「やや不満」がそれぞれ6人(20.7%)、「不満」が3人(10.3%)であった。それぞれの理由として記載された内容は表1の通りである。

表1 生活の満足度(自由記載)

| | |
|------|---|
| 満足 | 限界集落ですが幼少より馴染んで来た文弥人形浄瑠璃と糟糠の妻も健康であり毎晩少量の酒肴を楽しんでいる。願わくば歴史の宝庫の村の存続を期んでいる。 |
| | 恵まれた自然環境の中で健康で生活できることを幸せに思っています。 |
| | 生まれ育ったところで、長男夫婦と一緒に生活している。 |
| まあ満足 | 大自然が良い、夏は涼しい。 |
| | のんびりとして落ち着く。あまり買い物に行かないからお金を使わない。 |
| | 汗をかき好きなことをして過しているから。 冬は寒いが、夏はずすしく住みやすい。 |
| やや不満 | 除雪作業がづらい。 飲料水及び大雪時の除雪。 |
| | 今年は雨が多く、毎日虫と戦っています。家の中に虫が入ってきます。 (ムカデ、ムカデの小さいの、だんご虫、コヤス、くも) |
| | 医者への通院が大変。 |
| 不満 | 交通の便が悪いので。 雪が多いから。 雪が多く、雪のやり場がない。水が少ない。人口も少ない。若い人もいない。 |

⑩地区以外への外出状況として、「月に数回程度」と回答した人が最も多く12人(41.4%)であった。次いで「週に数回程度」が6人(20.7%)、「毎日」が3人(10.3%)、「殆ど外出しない」が2人(6.9%)であった。

⑪日常、よく使う交通手段として、「自家用車」と回答した人が最も多く、16人(55.2%)、次いで「家族の車」が4人(13.8%)、「自転車」が3人(10.3%)、バスが2人(6.9%)であった。

⑫よく利用する食料品等の購入先として該当するものを複数選択してもらったところ(n=50)、「鶴来周辺」と回答した人が最も多く19人(65.5%)であった。次いで「グリーン手取り(吉野谷)」が15人(51.7%)、「松任周辺」が6人(20.7%)、「生活協働組合を利用する」「尾口周辺」がそれぞれ4人(13.8%)、「その他」が2名(6.9%)であった。

⑬地区で生活する上で不便だと思われることで該当するものを複数選択してもらったところ(n=61)、「除雪作業」と回答した人が最も多く19人(65.5%)であった。次いで「通院」が17人(58.6%)、「買

い物」が 12 人 (41.4%)、「通勤・通学」が 6 人 (20.7%)、「趣味・余暇活動」が 3 人 (10.3%)、「福祉サービスの利用」が 2 人 (6.9%)、「ごみの処理」「その他」がそれぞれ 1 人 (3.4%) であった。

⑭現在、地区に住み続ける理由として該当するものを複数選択してもらったところ (n=62)、「これまで生活してきたから」と回答した人が最も多く 14 人 (48.3%) であった。次いで「先祖代々の家を守るため」が 13 人 (44.8%)、「のどかに暮らせるから」が 11 人 (37.9%)、「文弥人形浄瑠璃があるから」が 9 人 (31%)、「人間関係が良いから」が 7 人 (24.1%)、「他に住むところがないから」が 6 人 (20.7%)、「その他」が 2 人 (6.9%) であった。

⑮現在、参加している地域活動として該当するものを複数選択してもらったところ (n=42)、「清掃活動」が最も多く 8 人 (27.6%) であった。次いで「地域の役員としての活動」が 7 人 (24.1%)、「老人会活動」が 6 人 (20.7%)、「防火活動」「祭事」がそれぞれ 5 人 (17.2%)、「共同施設の維持管理」が 4 人 (13.8%)、「婦人会活動」が 3 人 (10.3%)、「その他」が 4 人 (13.8%) であった。

⑯将来への心配事・不安について該当するものを複数選択してもらったところ (n=114)、「地滑りや大雪などの自然災害」と回答した人が最も多く 18 人 (62.1%) であった。次いで「自分や家族の健康」が 16 人 (55.2%)、「病気になった時の対応」「サルなどの野生動物による被害」がそれぞれ 14 人 (48.3%)、「地区の人口減少」が 13 人 (44.8%)、「自分や家族の介護」が 11 人 (37.9%)、「生活費など経済的なこと」が 8 人 (27.6%)、「子供や孫の将来」が 6 人 (20.7%)、「後継者について」「文弥人形に関すること」がそれぞれ 4 人 (13.8%)、「住宅に関すること」が 3 人 (10.3%)、「仕事」が 2 人 (6.9%)、「その他」が 1 人 (3.4%) であった。

⑰現在親戚以外で悩みを相談できる相手では、「地区の中に相談相手がいる」と回答した人が最も多く 10 人 (34.5%) であった。次いで「相談相手がいらない」が 7 人 (24.1%)、「地区の外に相談相手がいる」が 5 人 (17.2%)、「その他」が 2 人 (6.9%) であった。

⑱地区の魅力として他の地域に誇れるものとして該当するものを複数選択してもらったところ (n=65)、「文弥人形浄瑠璃」と回答した人が最も多く 15 人 (51.7%) であった。次いで「自然環境」が

表2 地区で安心して暮らしていくために必要だと思うこと(自由記載)

| 文脈単位:16(記録単位:11) | サブカテゴリ | カテゴリ |
|---|------------|------------|
| 雪がふったら道路が悪いから除雪を良くしてほしい | 除雪対策 | 除雪対策 |
| 冬の除雪は絶対に必要! | 除雪対策 | |
| 豪雪地帯、高齢化、人口の減少により、限界集落で時間の問題である。私が願うことは、高齢者でも元気であれば生活出来ますので、道路除雪、屋根雪の除雪 | 除雪対策 | |
| 大雪の時の心配(雪かき、雪下ろし) | 除雪対策 | |
| 畑とか家のまわりにイノシシが出るから住みにくい | 野生動物の対応 | 野生動物の対応 |
| 動物が多すぎる | 野生動物の対応 | |
| 昔のように山も自由に歩ける様に山道の整備 | 山道の整備 | 山道の整備 |
| 山道の補強 | 山道の整備 | |
| 食料の配達等がこれから必要になってくと思います | 食料の配達 | 食料の配達 |
| 介護を必要とする家族が入所できる施設をもっと多く! | 介護施設の確保 | 介護施設の確保 |
| 病気にならず命を全うすること | 健康状態の維持 | 健康状態の維持 |
| 地区全体の横のつながりの強化 | 地区の連携強化 | 地区の連携強化 |
| 地域の人達とのコミュニケーションをとること。高齢者が多い中で何かと手助けが必要 | 地区の連携強化 | |
| 百万県民の命の水瓶を造る為に鶉谷、深瀬、釜谷、五味島、白峰村、桑島の多くの同朋が去り、共同体が破壊された。過疎とのハサミ撃ちに会いましたが、立直る素材は充分有ると信じている。 | 地区存続のための工夫 | 地区存続のための工夫 |
| 若い人達が安心して生活できる為の職場 | 若者の職場の確保 | 若者の定住 |
| 若者の定住、人口の増加 | 若者の定住 | |

14人(48.3%)、「驚走ヶ岳」が12人(41.4%)、「白抜山」が10人(34.5%)、「住民の団結力」が8人(27.6%)、「その他」が2人(6.9%)、「特にない」が4人(13.8%)であった。その他として「住民の団結力が悪い」「自然な草木」が記載されていた。⑲今後も地区で安心して暮らしていく為に必要だと思うことについて自由記載を求めたところ、11名の回答が得られた。得られたデータの内容を検討したところ、更に16の記録単位が抽出できた。類似した内容別に分析したところ、「除雪対策」「野生動物の対応」「山道の整備」「食料の配達」「介護施設の確保」「健康状態の維持」「地区の連携強化」「地域存続のための工夫」「若者の定住」の9つのカテゴリに整理できた。カテゴリ別に記録単位数を見ると、「除雪対策」は4、「若者の定住」はそれぞれ2、「食料の配達」「介護施設の確保」「健康状態の維持」「地区存続のための工夫」はそれぞれ1であった(表2)。

(3) まとめ

調査結果から高齢化が進み、住民の52%程度が70歳以上の高齢者である。将来への心配や不安として自然災害や野生動物の被害、健康や介護に関するものが多い。現在は健康であると感じている人の方が多いが、加齢と共に健康状態の悪化や要介護状態になることが予測される。介護保険サービスについて知らない人が多く、制度に関する知識や理解を深める取り組みを実施することで、将来の介護を心配する人の不安の軽減に繋がるのではないかと。そして山間部で降雪量が多いことから除雪に関する問題がある。除雪は肉体的負担が大きく高齢には困難である。また病院や買い物先が遠方であり交通の便が悪いことから、交通手段として自家用車を利用する人が目立つ。しかし高齢者の自動車事故が増えていると報告があるように²⁾、安全性の問題や加齢により運転が困難となることを予測すると、今後の移動手段が課題となる。そして、この地域の伝統文化である文弥人形浄瑠璃の継承者がいないことも課題である。住民の減少に対し、スローライフを希望する他の地域からの移住の受け入れも一つの手段ではないか。

3) 調査3：調査2の報告および住民への半構造化面接

(1) 調査目的と方法

住民が地域や行政に期待するもの・求めているものは何かを明らかにすることを目的に、調査2の結果を住民に報告した後、当日参加した住民3名を対象に半構造化面接を実施した。住民1人に対し学生3~4人で40分程度面接した。面接内容は調査2で生活課題として挙げられた除雪対策や移動手段、他の地域からの移住等である。

(2) 結果

40代、60代、70代の男性を対象に面接した。現在の除雪状況として市道は市が除雪するが、各家庭は個人で行う。屋根雪を下ろした後の雪の始末が大変で、機械がないとできない。除雪機は市の援助を受けて現在2台購入した。個人で持っている人がいるが、小さくてあまり役に立たない。高齢者だけでは除雪は困難で、息子たちが休日を利用して除雪のために帰省する。屋根の融雪装置は助成金で購入したとしても維持費がかかるため設置は難しい。除雪に必要な支援は人手である。機械の使用は高齢者には困難となる為、若者の手助けが必要。移動手段として車の運転ができなくなった場合、ここには住めない。冬は4輪駆動でなければここまでの坂道を運転できない。タクシーの利用も可能だが、費用がかかるため、年金生活者には経済的に厳しい。運転できないほどの状態になったら、施設に入りたいが、金銭面で不安が残る。携帯電話を持つ人は増えているが、パソコンを使う高齢者は少ない。今後も地区に住み続けたいが、豪雪地帯に住むのは大変。周辺に仕事がないため若者は地区から出て行く。また、息子にも帰って来いとは言えない。雪と仕事がないことが若い人が少ない最大の理由だと思っている。他の地域からの移住者の受け入れは歓迎するが、雪を克服できる相当強い人でなければ難しい。文弥人形浄瑠璃も、平日は町で暮らす仲間が戻る週末しか練習できない。また、上演する場合、20名以上のスタッフが必要だが、現在はぎりぎりの状態。現在のメンバーが欠けると存続は難しい。

(3) まとめ

山間部の豪雪地帯であること、周辺に仕事がないこと、通勤距離が長いこと等が過疎化の大きな原因

である。そして、人口の増加を住民自らがあきらめている傾向にある。また、文化の伝承も危ぶまれており、今後は他の地域からメンバーを受け入れるなど、活動や運営の工夫が必要である。

4) 調査4：高齢者の視点で生活環境の視察

(1) 調査目的と方法

質問紙調査および面接調査から得た課題を基に、東二口地区の環境を視察した。

(2) 結果

地区は白山市内から40km程度の山の中腹にあり、自然豊かな場所に位置している。集落を通る主要道路は国道からスロープのあるカーブを何度も描くように続き、その道路を挟むように民家がある。道路の幅は6~7mあり、比較的広い。斜面に集落が位置している。集落の中心地には地滑り防止工事による貯水タンクが設置されている。一番近い病院・診療書は旧吉野谷村にあり、そこまで20分程度時間がかかる。地区の近くを通るバスは、私鉄バスで1日8本、コミュニティーバスの運行は1日2本である。また、バス停から民家の集落がある場所まで数百mの距離があり、なおかつ上り坂となっている。雪のある時期に地区を調査できなかったが、過去の写真や住民の話から、多い時は一晩で30~50cm程度の積雪が見られ、冬季間で2m程度に達することが分かった。

6. 調査研究の成果

以上の調査から、山間部の豪雪地帯であること、周辺に働く場所がないこと、通勤距離が長いこと等による若者の流出が東二口地区の過疎・高齢化の背景にあり、住民は除雪対策や野生動物の対応、食料購入等の生活維持、健康・介護に関する不安、人口減少に関する不安を抱えていた。そして、人口の増加を住民自らがあきらめている傾向にあり、大きな問題である。その意識を変えない限り、過疎化を食い止めることは難しい。これは周辺地域においても同様のことが言える。そのため、地域が連携・統合したとしてもその維持は難しく、総務省の示す集落の維持・活性化対策の集落のあり方について検討する流れ³⁾を参考にすると、現在の東二口地区の置かれている状況は、連合・統合で維持が困難であり、現在地に住み続けたい住民の支援として、生活支援を検討する段階となる。生活支援として白山市では白山麓地域定住促進対策として、雪対策、野生動物対策、定住促進対策、移動手段の確保、集落支援事業等を行っているが、効果は見られていない。最も重要なのは雇用対策であり、これを検討するほか、もっと住民の身近な問題に着眼することが重要ではないだろうか。

7. 調査研究に基づく提言

東二口地区で安心して暮らせる地域づくりとして、買い物支援（買い物代行や食品の移動販売等）、交通手段としてデマントタクシーの活用（電話予約で運行する乗り合いタクシー）、除雪のためのボランティアネットワークの構築、住民の健康保持のための移動診療所等の検討を提案する。また、生活問題に大きな影響を与える雇用対策の検討が望まれる。

8. 調査研究の自己評価

本調査は住民への質問紙調査と数人を対象とした面接調査を基に検討しているため、十分に住民の意見を反映できているとは言い切れない。今後は更に調査を進めると共に、学生と住民の交流を増やし、住民の意識改革の一助になればと思っている。

注

- 1) 和気康太（2007）「地域福祉計画の視点と方法」牧里毎治・野口定久・武川正吾・和気康太編『自治体の地域福祉戦略』学陽書房
- 2) 内閣府（2006）「高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査」
- 3) 総務省（2009）「平成20年4月24日過疎問題懇談会資料」